

令和4年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	特定非営利活動法人鳥の劇場	
施 設 名	鳥の劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内 定 額 (総 額)	21,830	(千円)
	公 演 事 業	17,637 (千円)
	人 材 養 成 事 業	2,845 (千円)
	普 及 啓 発 事 業	1,348 (千円)

(1) 令和4年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	観客の輪を広げる・トルストイ『イワンのばか』	R4年4月23日～5月14日	演目：イワンのばか 出演：中川玲奈、齊藤頼陽・高橋等 他 演出：中島諒人 舞台監督：原口佳子 他	目標値	1,900
		鳥の劇場		実績値	1,073※
2	和の世界を味わう・三島由紀夫「近代能楽集」より「葵上」	R4年7月28日～31日	演目：三島由紀夫作 近代能楽集「葵上」 出演：齊藤頼陽、高橋等、中垣直久 他 演出：中島諒人 舞台監督：三津久 他	目標値	700
		鳥の劇場		実績値	330※
3	不朽の名作に日本の今を重ねる・チャーホフ「三人姉妹」	R5年2月10日～3月5日	演目：チャーホフ作 「三人姉妹」 出演：齊藤頼陽、後藤詩織、中川玲奈 他 演出：中島諒人 舞台監督：酒井周太 他	目標値	1,800
		鳥の劇場		実績値	726※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和4年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	自分で考え、自分で行動する子どもを育てる「小鳥の学校」	R4年6月～R5年3月	演目：怪盗二十面相 出演：子どもたち 演出：子どもたちと中島諒人 他	参加者 20 入場者 360	参加者 17 入場者 276
		鳥の劇場			

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和4年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	演劇を味わう みんなのための「戯曲の講座」	R4年11月～R5年3月	『人形の家』『彦市ばなし』 参加者：高校演劇部、一般 スタッフ等：鳥の劇場俳優 他	目標値	参加者 150
		学校、公民館		実績値	参加者総数 96
2	高齢者と創る「おとなな劇場」	R4年12月～R5年3月	「頼母しき求縁」「取引にあらず」 「カライ博士の臨終」出演：参加者 構成・演出：齊藤頼陽	目標値	参加者 10・ 入場者 60
		鳥の劇場		実績値	参加者 10・ 入場者 45

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>社会的役割として、1、感動、共感、他者とのつながりの創出 2、演劇の力を通じての社会教育、人材養成 3、地域活性化の基盤として の3つを掲げた。</p> <p>劇場の社会的存在価値を最も基盤のところで支えるのは、演劇作品の上演により観客の心を動かすことである。「お芝居はおもしろいものだ、劇場は特別な場所だ」と感じてもらうことが、すべての劇場活動を根の部分で支える。とはいえ、「演劇は難しい」と感じている人がまだまだ多く、2006 年以来継続している鳥の劇場の活動においても、そういう層は、継続的に辛抱強く切り崩していくべき対象である。この切り崩しのため、まずは公演3作品を多様なものとし、子ども対象・高齢者対象、アウトリーチ事業を組み合わせ、年間の適切な時期を考慮しながら事業展開した。5月の大型連休に世代を超えて楽しめる公演『イワンのバカ』を配置、鳥取を思わせるのんびりとした世界が、戦争によって侵略される様子は、数ヶ月前に始まったウクライナ戦争ともつながって、観客の共感と感動を読んだ。4月からの告知期間を経て7月に子ども向け人材養成事業「小鳥の学校」を開始、以後、定期的に授業を実施。8月には夏休みをねらって生霊の登場する三島由紀夫『葵上』を公演した。夏休み特別企画的位置付けで、オーケストラ・アンサンブル金沢の来演を盛り上げることができた。秋以降は、2月の新作公演の準備を進めつつ、高齢者対象事業やアウトリーチ事業の準備を具体化し、12月末からの本格的稽古を経て2月にチェーホフ『三人姉妹』公演を、充実した形で実現できた。3月には、春休み期間を生かしながら「小鳥の学校」の発表公演を実施し、高齢者向け事業「おとなな劇場」も集中的に稽古を実施して、2回公演を好評のうちに終えることができた。</p> <p>全体として、上記3つの社会的役割を果たすために、公演、人材養成、普及啓発の3種事業を、年間の適切な時期に配置しながら、予定通りに実施することができた。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>文化的意義</p> <p>『イワンのバカ』狡猾で利己的・侵略的であることが賢く、まじめで他者への思いやりがあるものが「バカ」とされるこの芝居は、戦争や環境破壊、経済格差拡大など、現在の地球の課題、日本の課題を考える機会を提供した。それを重苦しい形でなく楽しくとぼけた世界観の中で示したことで多くの親子連れにも喜ばれ、「演劇は楽しい」と感じてもらうことができた。</p> <p>三島由紀夫・近代能楽集『葵上』特筆すべきは、オーケストラ・アンサンブル金沢との共演であった。千住明氏による書き下ろしの曲の生演奏が芝居を彩った。金沢と鳥取という地方都市での活動、ともに芸術家が常駐する場、共通点の多い二つの劇場・音楽堂の共同の文化的意義は大きい。</p> <p>『三人姉妹』チェーホフの代表作の一つを現代日本のバスターミナルに設定を変えての上演で、生きることの苦しみや不安、孤独を浮かび上がらせた。他劇場芸術監督から、「こんなに面白いチェーホフははじめて」という評をもらい、劇評家からも大変高評価で劇評の発表が待たれる。</p> <p>社会的意義</p> <p>『イワンのバカ』『三人姉妹』は、ともに18公演を行い、それぞれに来場者数1073人、726人であった。人口57万人の鳥取県で、良質な作品をある程度長い期間上演し、鑑賞機会を提供できたことは、演劇鑑賞機会の乏しい地方の状況の中で大きな社会的意味があった。特に鳥取で発行部数最大の地方紙日本海新聞の一面コラムに『イワンのバカ』が取り上げられたことは、劇場活動を社会的に知らしめる意味で大変インパクトがあった。人材養成としての小鳥の学校の発表公演（来場者数276人）を通じて、演劇が自分の言葉で堂々と話すことのできる人材を育てられることを示した意義は大きく、観客にも驚きを持って迎えられた。</p> <p>経済的意義</p> <p>劇場のある鳥取市鹿野町は、鳥取市中心部から車で30分ほどの距離があるいわゆる中山間地であるが、劇場活動の活発な展開と地域の町づくりの営みの継続が連携し、移住者によるカフェや雑貨屋などが少しずつ増えている。公演（14時開演）の際には、鳥取駅から鳥取大学を經由して劇場に至るバスを、昼食時間を絡めて動かすことで、劇場近隣の飲食店に客が流れている。（町づくり協議会が把握している鹿野町への移住者は5組10人、この数字には鳥の劇場の活動の継続は有意に貢献していると考えられる。）</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

<公演事業>

目標 1 質の高い作品による感動の広がり

指標 「この公演を見て、心が動かされるような感じがありましたか?」への肯定的回答の率 75%

実績 達成(「イワンのばか」87%(回収数 572)「葵上」81%(回収数 189)「三人姉妹」79%(回収数 486))

目標 2 観客層の拡大

指標 「イワンのバカ」新規観客を 500 人獲得 「三人姉妹」新規観客を 400 人獲得

実績 アンケート来場歴より推計「イワンのばか」約 350 人(70%達成)「三人姉妹」約 260 人(65%達成)

目標 3 観劇体験をもっと深いものに

指標 プレトークとアフタートークについて、両方を体験した人を対象にグループインタビューを実施し、プレトークなしで観劇した場合との違いについて、またアフタートークを通じて感じたことについて尋ね、プレトーク、アフタートークによって劇場体験が深まったかどうかを確認する。

実績 グループインタビューを「イワンのばか」・「三人姉妹」で各 1 回実施(それぞれ 3 人を対象)。「イワンのばか」では、トルストイの思想について知ること、ウクライナ戦争下での上演の意義がより深く感じられたという感想があった。「三人姉妹」では、チャーホフ独特の群像劇スタイルやわかりやすい主題が示されないことなどを事前に説明することで、観劇に集中し作品世界に入りこめたという感想が多かった。

<人材養成事業>

目標 1 若い世代のコミュニケーション力育成

指標 全ての創作参加者を対象に、事業開始時と全事業終了時に同じアンケートを取る。全体の傾向として事業実施により、肯定的な回答が有意に上昇する。

実績

だれかと何かをやることは楽しい(回答数 17)

事業実施前 「思う」41.2%「少し思う」41.2%「どちらでもない」17.6%

事業実施後 「思う」82.4%「少し思う」0%「どちらでもない」17.6%

「少し思う」だった参加者が全員「思う」に変化した。

うまくいくかわからないことに対しても意欲的に取り組める(回答数 17)

事業実施前 「思う」29.4%「少し思う」23.5%「あまり思わない」35.3%

事業実施後 「思う」35.3%「少し思う」47.1%「あまり思わない」5.8%

「思う」「少し思う」が増加した。

達成:協働的な活動への積極性が増している。

<普及啓発事業>

目標 1 まだ劇場に来ていない人に出会い、戯曲のおもしろさ・声に出して読むことの楽しさを知ってもらい、劇場への来場を後押しすることを目指す。

目標 2 高齢者に戯曲を演じる楽しさと難しさを体験してもらう。

指標 より多くの参加者との出会い 事業 1 100 人 事業 2 10 名

実績 達成:事業 1 の参加者総数 96 名 事業 2 の参加者数 10 名

指標 より多くの施設と連携する 事業 1 連携施設数 6 以上

実績 達成 連携施設数 10

指標 病院、高齢者施設など外出の困難な人のところにも出向き、演劇の面白さを味わってもらう。病院、高齢者施設で最低一箇所ずつの実施

実績 達成:新型コロナのため病院、高齢者施設での開催は不可能であったが、高齢者の学びの場(若桜町立「寿大学」)で開催した。

【分析】 公演事業では来場者の体験の質と来場者数の拡大を目標とし、質については達成できたが、新規来場者数については目標設定に及ばなかった。コロナという要因もある中でやむを得ない部分もあるが、新規顧客の開拓は工夫を続けなければならない。

【自己評価】 令和 4 年度実施の普及啓発事業の中で、アウトリーチとして行なった事業 1 が鳥取県内各所に出かけての事業で新しい出会いが多かった。この出会いが令和 5 年度の新規来場にもつながっており、手間のかかる事業ではあるが地道な継続が果実を産むという手応えを残している。新規顧客の開拓において、具体的な目標数を定めることには難しさがあるが、今後も積極的に目標を定めて実績を上げる努力を継続していきたい。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

公演事業『イワンのバカ』『三人姉妹』はそれぞれ18回公演を行い、それぞれ1000人程度の入場者数であった。休日と週末を生かしながら、公演回数を増やすことで、より多くの観客に演劇との出会いの機会を持ってもらうことを狙った。観客の少ない平日は中学校の修学旅行の受け入れなども行い、効率的な事業運営となるよう努めた。

公演事業については、まだまだコロナの影響が大きく、入場者数の伸びを欠いた部分は否めないが、基本的な劇場運営方針として、公演数を多めに設定し観客の掘り起こしのための努力を継続していきたいと考えている。

公演事業の準備期間は集中したりリハーサル期間が一ヶ月前後と決して十分とは言えない。が、劇場付きのアンサンブルの強みを発揮して、短期間の中で質の高い創作を実現している。

人材養成事業「小鳥の学校」では、年間を通じて定期的に子どもたちと出会いながら事業を進めていくことが、子どもたち相互の関係の深まりにも通じ、醸成された関係の濃さを最後の発表公演に向けて投入する形がうまく機能していると感じられる。7月から3月までという継続のメリットだと思われる。

一方65歳以上対象の「おとなな劇場」は、参加者の体力の問題もあり、集中する期間を凝縮することでアウトプットの質を上げるよう努めている。

アウトリーチ事業は、期間をある程度限定的にして(3月を中心)鳥取県内各地を巡回し、効率と運営の質を高めた。

どの事業も総じて、適切な事業機関で当初の計画通りに進めることができた。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

公演事業においては、入場者数拡大＝演劇を楽しむ人たちが獲得のために、週末を中心としてなるべく長期間公演することを方針としている。同じ狙いのもと、広報にも比較的多くの費用をかけ、「鳥の劇場」を知ってもらうとともに、名前を知っていてもまだ来場したことのない多くの人の背中を押すきっかけを作ろうと努力している。コロナによる影響が大きかった中、結果の入場者数だけを見ると費用に対して不十分とも見えるが、鑑賞者層の拡大という大目標に向けて、適切な計画・支出であったと考えている。

その他支出は、劇場付きのアンサンブルを中心とした配役により、リハーサルを効率的に行い、衣装や小道具などもすでにあるものをうまく使い回す工夫なども適宜行うことで、コストの低減に努めている。

人材養成・普及啓発ともに、参加者数に比して事業費がかさむ傾向である。が、これも子どもの人材育成、高齢者の健康や社会参加、劇場から遠隔地への演劇価値の普及という目標から考えて、適切な事業費だと考えている。

総じて、地方での活動は未来の観客増、未来の人材等のための投資的側面が強い。事業費は可能な限り抑え、適切な期間、適切な費用で運用されることにはしっかりと留意しているが、「未来」という視点も常に忘れないようにしながら、バランスの取れた運営を常に目指している。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

<公演事業>

『イワンのバカ』公演では、劇場常駐の俳優アンサンブル 6 名に客演俳優 5 名を加えて総勢 11 名、『三人姉妹』では劇場常駐の俳優アンサンブル 7 名に客演俳優 5 名を加えて総勢 12 名で上演を行った。力のある客演俳優が配置されることで、劇場常駐の俳優たちにも刺激となり、演出を務めた芸術監督も大きな創作の手応えを感じることができた。

特に『三人姉妹』は演劇の世界では重要な作品であり、この作品にどう向き合い、現代日本とどのようにつないでみせるかは、創作機能を持つ劇場としての真価が問われるものであった。一般観客だけでなく演劇人や劇評家からも非常に高い評価を得て、創作陣に大きな自信を与えた。

三島由紀夫近代能楽集『葵上』は再演を重ねた演目で、歌謡曲版とオーケストラ生演奏版の二種を演出を変えて上演した。千住明氏のオリジナル曲をオーケストラ・アンサンブル金沢が生伴奏するバージョンは、非常に豪華なものとなり、三島由紀夫が「源氏物語」を土台にして描いた絢爛な言葉と、千住氏による緻密で重厚、時に哀切な楽曲、オケによる息のあった美しい演奏が重なって、平安時代と現代をつなぐ雅で壮麗な劇世界が築かれた。関係者全員が充実感にあふれ、今後もこのようなコラボレーションを展開していきたいとの思いを共有した。

<人材養成事業>

「小鳥の学校」は小学校 5 年生から中学校 3 年生を対象にし、劇場の俳優やスタッフの助言に基づきながら、可能な限り子どもたちの力で演劇創作を進めるもの。創作活動を通じて、これからの社会を築くのに必要な「自分で考え、行動する力」を育むことを目指す事業。

鳥取県全域から毎年 20 名弱の参加者がある。この事業が劇場内部に残すのは、「演劇が子どもたちを変える」という手応えである。劇場スタッフは、子どもたちとどのようにコミュニケーションしていけば彼らに良い刺激を与えられるかについて工夫を重ねる。この工夫の蓄積が、この事業の毎年の人気のもとであり、子どもたちだけでなく保護者や観客も含めて、「演劇は子どもたちを育てるのに必要である」と感じてもらえる。そのことが劇場活動全体に勇気と活力をもたらしてくれる。

<普及啓発事業>

県内各所に出かけて戯曲を読む体験を高校生やお年寄りを含む一般市民に味わってもらい、また劇場で高齢の方とのリーディング公演を行なった。どの事業も対象者 10 名程度の小さい催しであり、演劇的にはかなり基本的なことを行う事業だが、短い時間の中で参加者の特性や個性を見抜き、演じることを楽しんでもらえるようにするのはファシリテータとしてかなりの習熟を要する。参加者の中の演じたい気持ちとうまく呼应し、その人が生き生きとなり、演劇をもっと好きになってもらえるよう組み立てることは容易ではないが、俳優やスタッフに大きな喜びを与え、地域社会の中での演劇という専門性の価値を深く認識する機会となっている。

全体として

芸術監督や俳優アンサンブルが持つ創造性を、作品創作において十分に発揮することができた。また、子どもや一般市民との活動においては、活動参加者一人ひとりの喜びや可能性を引き出すために、俳優たちが蓄えた専門性を生かすことができた。劇場に作り手がいることの価値を、助成対象活動全体において高めることができた。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

■地域の文化芸術の発展につながるということでは、まずは公演事業への注目度の高まりがある。演劇が一部愛好家だけのものではなく多くの人を楽しめるもので、そこには豊かな現代性があることが、地域の人々に届けられるようになっている。

『イワンのバカ』

日本海新聞 海潮音（2022年5月8日 一面下のコラム全文）

鳥取市鹿野町の鳥の劇場で公演中の「イワンのバカ」を見に行った。ロシアの作家トルストイが民話を基に100年以上前に書いた作品だが、今の状況と重なる部分が非常に多く、考えさせられた◆「人はなぜ殺し、壊すのか」「憎しみの連鎖を断ち切ることはできるのか」という根源的で普遍的な重いテーマにもかかわらず、子どもも気軽に楽しめる演出。ユーモラスな場面もあり、腹を抱えて笑った。一方、後半はこみ上げるものがあった◆悪魔に取りつかれイワンの国に侵攻した隣国の大統領は「全て焼き払え。これが私の戦争だ。焼き尽くせ。何もかも」と兵隊に勇ましく命令する。「ご覧ください。これこそがあなたが作り出した美しい国の『力』です」と大統領にささやく悪魔。「憎め、憎め、殺し合え」とあおるが、イワンは決して武器を手には取らない◆ロシアによるウクライナ侵攻は一向に出口が見えない。悪魔にそそのかされた独裁者は、いつ攻撃を止めるのか。イワンのように憎しみを断つことは可能なのか。実は悪魔は私たち一人一人の心にもいるのではないか◆先人の残した遺産から学び、共に考え、自分自身を見つめる。そんな場が身近にある。肩の力を抜き、まずは文化芸術に接することで平和を考えたい。

鳥取文芸協会 鳥取文芸選集(2022年9月号)より抜粋

畑仕事に精出すイワンたちの手が輝いて見える。第一幕のイワンの馬鹿の手が美しい光りに変わった。賢い人の手に見える。見事な逆転である。ここにこのドラマの真骨頂がある。私たち観客は、カタルシスに包まれ、心が洗われる。(浜本純逸)

『三人姉妹』NHK 鳥取 鳥取WEB特集

“鳥の劇場”に行ってきました～2年ぶりの新作『三人姉妹』～ より抜粋

現代の深夜バスのターミナルから、本の朗読で「三人姉妹」の世界へと転換していきます。現代の人たちが軍服などに着替えることで、すんなりとその世界観に入り込むことができました。(NHK 鳥取放送局アナウンサー小川浩司)

■来場者等のアンケートからも、演劇との出会いの喜び、地域に演劇活動が展開することへの喜びが語られている。

・より多くの方に見て欲しいと感じました。とっても幸せなイワンのように自分の幸せを見つけていきたいと思います。(30代)「イワンのバカ」

・1時間、ぎっしり詰まった長ゼリフ。舞台変化ないのに、何場面も観たような展開。「はっ！」と最後に大きくはきました。拍手して俳優さんの顔みてるうちにじわじわと、やっぱり舞台と観客と空間を供給できる生は良いなぁと感激込み上げました。(40代女性)「葵上」

・人生についてTVの中では中々教えてくれません。この場で人生や愛について考える時間がもてて幸いです。人生の目的や愛についての空腹感って気づいていないようで皆さがし求めているように思います。(女性)「三人姉妹」

人材養成事業「小鳥の学校」アンケート

・鹿野町のQOLが高くなっていっているのを感じています。親では力及ばない子どものパワーを引き出してくださり感謝しています。出演者のみなさまのキラキラした表情に元気をもらいました。(女性)

・小説から自分たちで考え脚本を作ったとは！音楽担当者も全員が交替してキャストも演じていたとは！関心することばかりでした。トーチャイムを使った不気味な演奏も。

博物館の絵も、鳥取のおばあちゃんのシーンもすばらしかったです。(50代女性)

普及啓発事業「戯曲の講座」アンケート

・演劇を自分で体験してみて興味が大変にわきました。今までのお芝居をするという概念がもっと身近なところを感じる事ができました。(30代女性)

・声を出せて楽しかった！これからはずかしいという気持ちを捨てて取り組みたいです。(60代女性)

・人前で話すことが苦手なのですが、流れののって人前でセリフを言うような状況に楽しさを感じる事ができました。(40代女性)

■主に公演事業を通じて、演劇に興味を持っている高校生・大学生との関わりもずいぶん増えており、彼らを対象とした別事業の展開も視野に入れている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

民間の活動者である当劇場にとって組織活動が持続的に発展するかは、地域に演劇文化が浸透し、そこから地域発展の可能性が見えてくるかということにかかっている。事業を通じてのアウトカムが、観客層の拡大、人材の育成、高齢者の健康増進や社会参加、学校教育での成果、コミュニティにおける新しいつながりの発展、他地域や外国との人的交流の拡大、観光などによる経済波及効果など具体の形として結実していくことの積み重ねが、結果として劇場活動への期待となり、観客増、地域からの寄付や支援へとリンクし、活動の持続と発展につながる。

事業計画と運営

当劇場は、劇場付きのアンサンブル（劇団）があることが特徴であり、俳優が制作スタッフとも連携しながら事業運営に深く関与している。運営者全員が、地域に長く根付いた生活者であり、地域の中の課題や可能性、キーパーソンなどについての情報を日常生活の中で蓄積している。それに基づきながら地域のニーズを把握し計画を立て、届けたいところに届かせることを明確に意識して運営を行なっている。

経営戦略

民間の活動として毎年ゼロから資金を積み上げるのは容易なことではなく、安定的な運営は常に課題であり続けている。「地域に必要不可欠なソフトインフラとしての劇場・演劇文化」という位置付けは行政的にも地域草の根的にも浸透してきている。寄付や行政からの支援を基盤に、多様な公演事業や体験事業、学校や社会教育施設へのアウトリーチなどを組み合わせて利用者数を拡大し、それにより民間や行政の資金を獲得し、事業を展開をしていくというのが、基本的経営戦略である。本補助金は、劇場文化の発信のために骨格的事業の遂行に活かしている。

人事戦略

1) 地元出身の若い人材の育成 劇場文化の価値を理解し、地域の未来を拓くための仕事をしたいと考える若い人たちの育成は活動の継続・発展のために不可欠である。本補助金の人材養成事業を通じて育った人材が、演劇に深く興味を持ち専門的に学んでいる例もあり、若い人材の育成をしっかりと行なっていくことは、組織活動の持続的発展のために重要である。

2) すでに活躍している専門人材の登用 他地域で活動している俳優に客演してもらったり、アウトリーチに参加してもらうことを積極的に行なっている。活動繁忙期の人手不足対策的側面もあるが、演劇人として優れた能力を持ちながら、それを社会的に十分発揮できていない人材も多くあり、そういう人たちと交流することでアンサンブルに新しい刺激となり、またワークショップ等のノウハウの共有や発展の機会ともなっている。多くの優れた演劇人の力を社会的に示していくことは、劇場にとっても社会的にも大きな意味を持っており、活動の継続と発展のために有効である。

ネットワーク構築

令和4年度はオーケストラ・アンサンブル金沢と連携した。国内の創作機能を持つ劇場や音楽堂との連携は質の高い作品を生むきっかけになるだけでなく、新しい観客との出会いの機会創出にもつながる。また鳥取県内での社会教育施設や学校とのネットワークもすでに活発に機能している。今後これをさらに発展させ、演劇芸術や劇場文化の価値の社会的浸透に活かすことは、組織の持続的発展に大きく寄与する。

PDCA 循環の継続と発展

繰り返しになるが、専門スタッフとアンサンブルの俳優が一体となって継続的に事業の全プロセスに関わっていることが当劇場の重要な特徴である。この特徴は、立案>実行>検証>改善>次の立案という過程の中で有効に機能していると自己評価している。